『佐伯史談会四十年の歩み』

(一)発足から平成まで

山本　保
（会員　佐伯市池船町）

史談会は、次のように発展・成長を続けてきました。その主なものを拾いあげてみました。

【佐伯地方郷土史研究の前身時代】

●明治三十五年（一九〇二）雑誌「豊国史談」によった鶴谷佐藤蔵太郎創立の「豊国史談会」（当時大分）の伝統を引き継いでいます。

●大正元年（一九一二）彼は、郷里佐伯で「豊国史談会」の看板をかかげて、郷土史研究とその著述に晩年を費やしました。

●昭和六年（一九三一）大亀忠等の「郷土科研究会」の名のもとに、「栂牟礼実録」（とがむれじつろく）の古写本の謄写印刷をしました。

●昭和二十四年（一九四九）増村隆也首唱で「佐伯史談会」を創設、これが佐伯史談の名称の起こりです。

●昭和二十六年から二十八年にかけて、彼は、名著「佐伯郷土史」前・後編を発刊しました。

●昭和三十二年、県の発掘調査が行なわれた白潟遺跡の保存会が設立され、その後佐伯市長出納菊二郎を会長とする「白潟遺跡保存会」によって、古代の竪穴式住居を復元し、その環境整備を行ないました。これは故羽柴弘が提唱した文化財保存顕彰事業の第一号であり、昭和三十三年三月二十五日県史跡に指定されました。

●昭和三十三年三月十六日、佐伯史談会が旧市内に誕生しました。会長柴田南華、会員は疋田泉、山田平之丞、平田幸市など、郷土史研究の大家ぞろいでした。

その頃、鶴岡地区でも、盛んでしたが、或る日有志十余名で、佐伯氏の居城跡・栂牟礼城の探訪を行ない、これが機縁となって、佐伯氏ゆかりの龍護寺で、鶴岡郷土史研究会が発足しました。

この会長は泉由蔵、会員は広瀬武夫・高野喜助・米沢惣吉・若杉吉祥・染矢貞雄・高木嘉吉・菅文雄・広瀬金太郎・緒方寿生・米沢惣吉、顧問疋田泉・土屋直己、書

記兼会計羽柴弘、会費は百円でした。

当時の決算書をみると収入七、八三〇円、寄付金が五、三一〇円で、支出の大部分は用紙代となっています。

羽柴氏の謄写印刷の冊子は、佐伯史談会・弥生町の史談会に無料で配布され、ともに手をたずさえて、歩こうとする姿勢がうかがわれました。

このように、たゆまぬ努力は徐々にみのって、昭和三十七年四一名、同三十八年七七名、同三十九年八七名の会員となりました。鶴岡郷土史研究会の会員増加は、開店休業中の佐伯史談会との合併気運と、機関紙刊行の声の高まりとなりました。

そうして、昭和四十年一月、念願の佐伯史談会との合同がまとまり、ついに「佐伯史談」第一号が生まれ、これは「郷土史研究」の改題復刊でもありました。

同年二月の第二号には、山田平之丞の佐伯文庫についての長文の寄稿があって、十六頁の佐伯文庫特集号となり、そして規約を制定し、会の名称を正式に「佐伯史談会」としました。同三月総会に代わる評議員会を開き、会長に高木嘉吉、副会長兼幹事に羽柴弘を選任、事業計画なども決定し、いよいよ本格的な活動期に入る準備はこの時に、およそ整いました。

この間、堅田史談会その他の会も、こぞって佐伯史談会に合流し、ここに念願の大同団結が実現しました。

同年十一月、幕末における郷土の代表的碩学・明石秋室百年祭及び遺墨展を行ないました。たびたびの旧家訪問研修などで、所持者はわかっていましたが、かけがえのない大切なものであるので、その趣旨を説明して、お願いしたところ、快諾をいただきました。

たまたま大分合同新聞の報道によって、進んで貸して下さる方々があり、臼杵・大分方面からも応募もあって八十三点の多数にのぼりました。不備な会場での展示で、会員の気の遣いようは大変なものでしたが、見学者は多くありました。

この時、「明石秋室先生」という、厚表紙二十二頁の記念冊子を百五十部謄写刷りして、出品者や講師に贈呈し、残部は実費で会員に配布しました。三日間の展覧会を無事終了した時は、みんなホッとするとともに、心から成功を喜び合いました。

●昭和四十二年十一月、佐伯史談会は文化功労者として佐伯市長より表彰をうけました。

●昭和四十三年三月、龍護寺において史談会発足十周年記念式と物故者会員慰霊祭を行ないました。記念事業として、佐伯が生んだ唯一人の幕末勤皇の志士・青木猛比古の百年祭及び資料展を催し、二十二頁の謄写刷りの「青木猛比古伝」を配布して、その顕彰につとめました。

研修旅行も、十周年を記念して県外を加え、日向路（宮崎県）に宗麟原の戦死者（栂牟礼城主十二代佐伯惟教、十三代佐伯惟真親子）の霊を弔い、さらに西都原の古代遺跡をたずねました。

●昭和四十四年、佐伯文化会館の建設予定地が、佐伯城三の丸を第一候補地としていると伝えられました。ここには、旧藩時代の三の丸御殿があり、桜も多く市民の憩いの場所です。御殿を取りこわせば、最も大切な遺構が失われます。

史談会は、市長や議会に陳情し、市民にビラを配布したりして変更を求めましたが、採択されませんでした。

しかし、船頭町住民の努力によって、住吉神社近くに移転され、現在住吉御殿として利用されています。

●昭和四十五年十一月、中世栂牟礼城主であった佐伯氏の位はいを新調し、佐伯氏ゆかりの龍護寺で、第一回位はいまつりを開催しました。以後毎年とり行なわれ、佐伯氏の子孫の参加も年々増え、昭和五十三年には遠く高知・宮崎・福岡各県よりも参加し、佐伯氏遺族会が誕生しました。

●昭和四十九年春、三の丸櫓門の修復工事募金を始めました。この櫓門は三の丸御殿なきあと、佐伯城跡に残る唯一の建築物ですが、屋根瓦はところどころはげ落ち、屋根には茅や雑草が生え、雨漏りがはげしく、軒先は朽ち果てていました。

史談会は、「三の丸櫓門修復保存会」を結成、三百五十万円を目標に、会員及び一般市民に趣意書を配布して、浄財を仰ぎました。その反響は意外に大きく、五百万余円（県・市補助金も含む）の寄付が集まり、同五十年四月漆喰もまばゆい櫓門の下で、竣工式を挙げることができました。

この間、建築の専門家である会員・清田義雄は、毎日工事現場に出て、研究と監督指導に当たりました。

修復工事費用の残金は、「佐伯地域文化財保存会」を設立して、佐伯市・南海部郡内の文化財維持・管理・顕彰などに充てることにしました。

●昭和五十年十一月十八日、史談会は「ふるさと大分賞」を県知事より受賞しました。

●昭和五十一年佐伯地区社会教育連絡協議会より、第一回「あけぼの賞」を受賞しました。

同年六月、中世佐伯氏の居城栂牟礼城跡（一二一四㍍）に、史談会独自で「栂牟礼城址」の石碑を建立することができました。

そして同年九月、西南戦争百周年にあたるので、市民に忘れられていた西南戦争戦死者の墓地（招魂所）を清掃し、墓前慰霊祭を行い、「招魂所墓碑調査書」（軍人一三三人、警察官一五人、合計一四八柱）二十二頁を謄写製本して配布しました。なお境内に、桜樹五十本を植樹しました。

さらに、十一月「ふるさと陶芸展」を開催し、まぼろしの「久部焼」・「波越（なんごう）焼」・「水ヶ谷（すいがたに）焼」を展示しましたが、市民に大きな話題をよびました。

●昭和五十二年「佐伯藩祖毛利高政公三五〇年祭」には数々の遺品（ぼろぼろになった鎧など）などを展示し、また、「佐伯惟治公四五〇年祭」も行ないました。

●昭和五十三年三月十九日、発足二十周年記念集会を龍護寺で開催し、物故会員の慰霊祭及び資料展も行ないました。

他方、「佐伯・国木田独歩会」を設立し、会長に狩生熊義、副会長に宮崎嘉一・武藤等、事務局長に岩城京が就任しました。

●昭和五十四年十一月、市芸術祭には「国木田独歩資料展」を実施しました。

佐伯史談会・佐伯独歩会合同で、独歩文学碑建設を押し進めましたが、思いもかけぬ百万円の大口寄付で、二百五万円の寄付が集まったので、昭和五十七年八月その完成・除幕式をとり行ないました。

同年、高木嘉吉会長、清田義雄副会長兼事務局長、塩月佐一編集長、岩城京会計の体制でその運営に当たることになりました。

●昭和五十六年十月十九日、大黒柱の羽柴弘副会長兼事務局長は逝去されました。

●昭和六十年二月十九日、大分県新生活運動推進協議会（会長　平松知事）及び、大分合同新聞社より「最優秀住民活動賞」の賞状並びに盾を受けました。

このように明治・大正・昭和・平成へと発展することができました。

これも、ひとえに、皆様方の御支援の賜物でありまして、紙上をお借りし、厚く御礼申し上げます。

【表紙解説】

城下町佐伯の古き時代で、自然を象徴する最も優れた風景といえば、池船橋を前景とした家並み越しに望む城山の山容であろう。それは今も残る絵画や写真等で目にすることができる。

池船橋は明治十六年（一八八三）久部・岡の谷の内田善太郎が、私財を投じて架橋(註)してから、年々歳々発生した水害によって幾度となく流失し、その都度民衆は不便を強いられていた。当時船頭町側には低水敷があって船着き場として利用され、近郷の村浦から集まる渡船の乗降客で賑わっていた。

また、夏期の花火大会や住吉神社の見立細工の晩は、大勢の見物客が押し掛け、橋上は通行もままならぬ位混雑した。

昭和十八年（一九四三）九月、佐伯地方は未曾有の大水害に襲われ、市街地の殆どが浸水するといった大惨事となった。

戦後県営による河川改修（昭和二六年五月国の直轄となる）が始まり、工事の進捗と共に旧番匠川の流れは天神津留で締め切られて樋門が設置され、洪水調節が行われるようになると派川に格下げとなって本川から外され、流水量は激減した。

そこで昭和三十九年三月から始まった城南地域の区画整理事業と、併行して行われた中江川左岸バイパス建設用地として埋め立てられ、現代の川幅に整備縮小されてしまった。今は昔の面影など偲ぶ術もない。

この絵は工藤幸夫先生が生前好んで書かれていたもので、今回同家の承認を得て紹介した。

(註)当時の橋長はどれ位あったか定かでないが、前記区画整理とバイパス埋め立て前（県道当時）の橋長が九二㍍であったことから、左程大差はなかったものと思う。

解説　林　寅喜